

天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る

—キルギス共和国シャムシー渓谷・ケゲティ渓谷の考古学調査(2024年)—

山藤 正敏 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所主任研究員

齊藤 茂雄 帝京大学文学部史学科講師

下岡 順直 立正大学地球環境科学部環境システム学科准教授

山内 和也 帝京大学文化財研究所教授

バキット・アマンバエヴァ キルギス共和国国立科学アカデミー歴史考古学民族学研究所所長

In Pursuit of Ancient Pastoral Nomadism in the Northern Foot of Tien Shan Range: Archaeological Research in Shamsy Valley and Kegeti Valley, Kyrgyz Republic (2024).

YAMAFUJI, Masatoshi Chief Researcher, Nara National Research Institute for Cultural Properties

SAITO, Shigeo Lecturer, Faculty of Liberal Arts, Department of History, Teikyo University

SHITAOKA, Yorinao Associate Professor, Department of Environment Systems, Faculty of Geo-Environmental Science, Rissho University

YAMAUCHI, Kazuya Professor, Research Institute of Cultural Properties, Teikyo University

AMANBAEVA, Bakit Director, The Institute of History, Archaeology and Ethnology, National Academy of Sciences, the Kyrgyz Republic

1. はじめに

キルギス共和国北部に位置するチュー渓谷東部には、6世紀におけるソグド人の進出に伴い建設されたシルクロード拠点都市の1つであるアク・ベシム(Ak-Beshim)遺跡が所在し、12世紀(カラハン朝)にかけて居住された。中央アジアではシルクロードの中世都市に着目した研究が盛んであることから、当該地域においてもアク・ベシム遺跡と近隣の関連都市遺跡に長らく考古学調査の主眼が置かれてきた(e.g., Кожемяко 1959; 城倉他 2016; 山内・アマンバエヴァ編 2016; 帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所編 2020, 2021等)。他方で、中世都市周辺における遊牧民の活動については、その痕跡が捉えにくいことも影響して、本格的な調査研究の対象とされることがなかった。

こうした調査状況を念頭に、本研究はアク・ベシム遺跡周辺における古代の遊牧活動を明らかにし、都市定住民との相互関係を体系的に理解することを目的として、同遺跡南方にそびえる天山山脈の前山、キルギス・アラトウ(Kyrgyz Alatau)山脈北麓において2022年8月以降考古学調査を実施してきた。2022年にはケゲティ(Kegeti)渓谷において踏査を実施し、小型円形遺構をはじめとする多数の遺構が小谷に沿って分布

する状況を確認した。これに続いて2023年には、平坦面付き小型円形囲い込み遺構 KGT22002-2 において発掘調査を実施し、その構造を明らかにした(山藤他 2023, 2024)。2024年8月には、東隣のシャムシー(Shamsy)渓谷に調査地を移して考古学踏査と発掘調査を実施するとともに、KGT22002-2 においても小規模な追加調査を行った(図1)。以下では、2024年8月に実施した調査成果の概要について報告する。

2. シャムシー渓谷における考古学踏査

シャムシー渓谷はキルギス・アラトウ山脈北麓を縦貫する主要な渓谷の1つであり、2023年まで調査を行ったケゲティ渓谷から約18km東に位置する。渓谷の中心には、シャムシー川が北の平野部に向かって流れる。同渓谷が北の平野部に向けて開ける地点の東岸、東西最大1.7km、南北最大3.5kmの範囲において、同渓谷内における遊牧民に関連すると思しき遺構を記録するために考古学踏査を実施した。調査地はシャムシー川東岸の河岸平野から急激に高まった台地状を呈しており、東西あるいは南東-北西方向の小谷が複数刻まれることで、小規模な斜面・台地と小溪谷が南北方向に継起するやや複雑な地形を呈している。考古学踏査では時間と労力を節減するために、Google Earth上で地物を事前に確認し、小谷に沿うかたちで

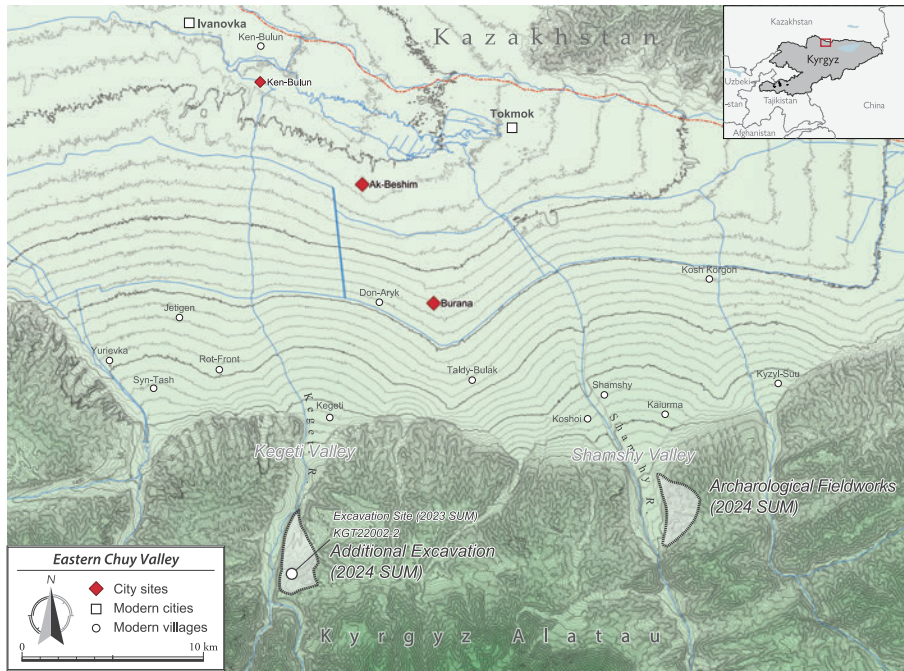


図1 調査地位置図

踏査を実施し各地物を確認する手法を採用した。

考古学踏査により確認した計44件の遺構は、生活遺構40件と葬送遺構4件から成る(図2)。生活遺構の大部分は、外周を土塁、内周を周溝により区画された囲い込み遺構(34件)で占められており、主に楕円形と円形に分類できる。楕円形囲い込み遺構(5件、図2中●)はおおよそ長径8~16.8m、短径4.5~6.5m程度と比較的大型であり、調査地の西寄り、シャムシー川の段丘平坦面を西方に見渡せる比較的開けた台地上に位置している。楕円形囲い込み遺構はケゲティ渓谷においてはこれまで確認できず、シャムシー渓谷において今回初めて記録した。これらの楕円形囲い込み遺構の周辺には、貯水池として利用されたと思しき周堤のみの遺構(6件、図2中▲)がしばしば見られた。他方、円形囲い込み遺構(28件、図2中○)は内寸で直径3.5~6.0mと全般的に小型であり、その分布は入り組んだ小谷の谷頭凹地あるいは兩岸斜面に集中する(図3)。このため、シャムシー川東岸の河岸平野からはこうした遺構を直接は目視できない。

上記の他、調査地南端に3件の墓地と1件のクルガンを確認した。墓地は台地上斜面に所在し、直径10~20m程度の円形マウンド墓数十基から成る。特に大きなものは調査地最南端のSMS24011において認められ、直径は38mに及び頂部には盗掘坑が残る。

3. SMS24001-1の発掘調査

考古学踏査によって記録した遺構のうち、その構造と年代を明らかにするために、特に残りが良くアクセスも容易な楕円形囲い込み遺構SMS24001-1を対象として発掘調査を実施した。楕円形囲い込み遺構もまた、その立地や規模に鑑みて、遊牧民に関わる遺構であることが推測される。

調査にあたっては、RTK測量によりUTM座標(Zone 43N)に基づく2m四方のグリッド・システムを遺構全体に適用した。遺構の南北方向の中軸線より東側を今回の調査対象とし、東西方向の中軸線北側に遺構を横断する調査区(12m×2m)を設定した(図4)。基本土層は上から、表土(5cm)、暗灰褐色土(10~20cm)、灰褐色土(10~15cm、土塁下のみ)、明黄灰色シルト(自然堆積土)である。

発掘調査によって、遺構の基本的な構造が明確化した。遺構は、外周を廻る土塁、その内側の周溝、周溝より内側の内庭から成る(図5)。土塁は、幅2.5m、現況で高さ0.35mを測り、掘削の最下層で見られた自然堆積土と変わらない土層を示したことから、おそらくは周溝の掘削により生じた土壌を一時に盛り上げて構築されたと考えられる。周溝は、上端の幅が1.7m、下端の幅が0.8m、深さは最大で0.85mを測り、断面逆台形を呈する(図6)。周溝の埋土上層は土塁からの流れ込みに由来し、機能時に堆積したと考え

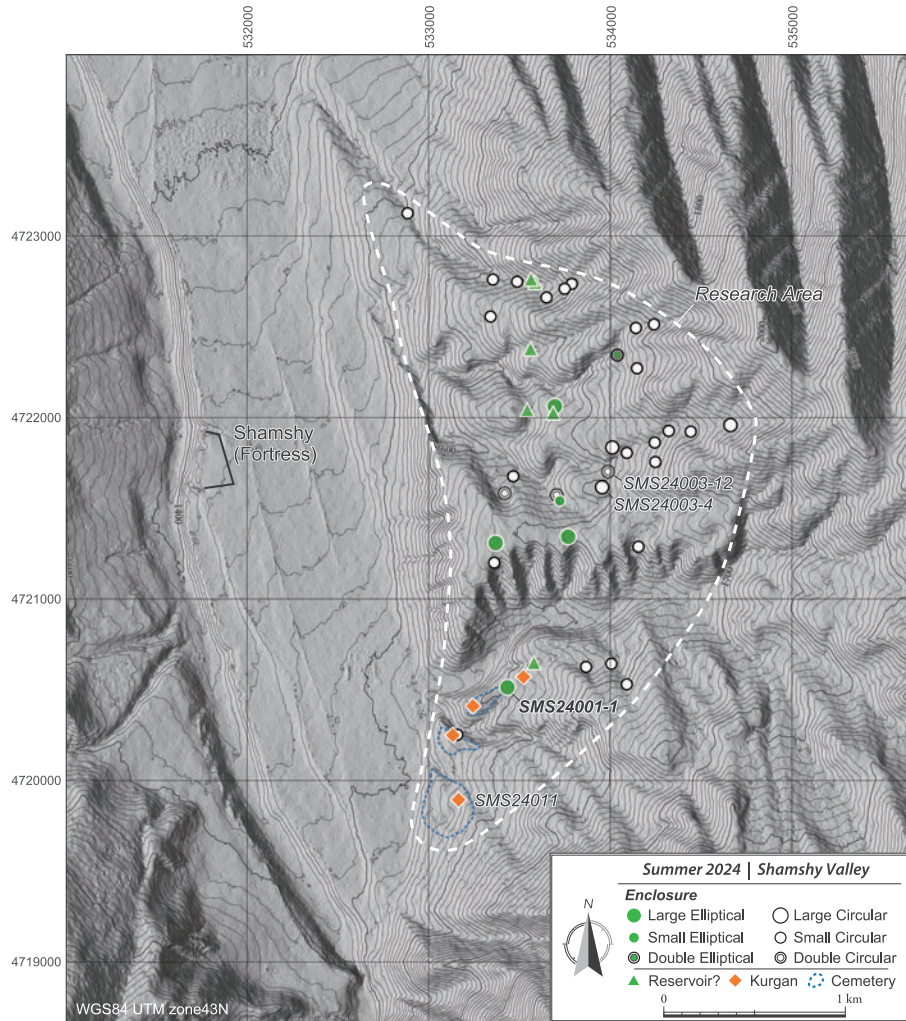


図2 シャムシー渓谷における遺跡分布

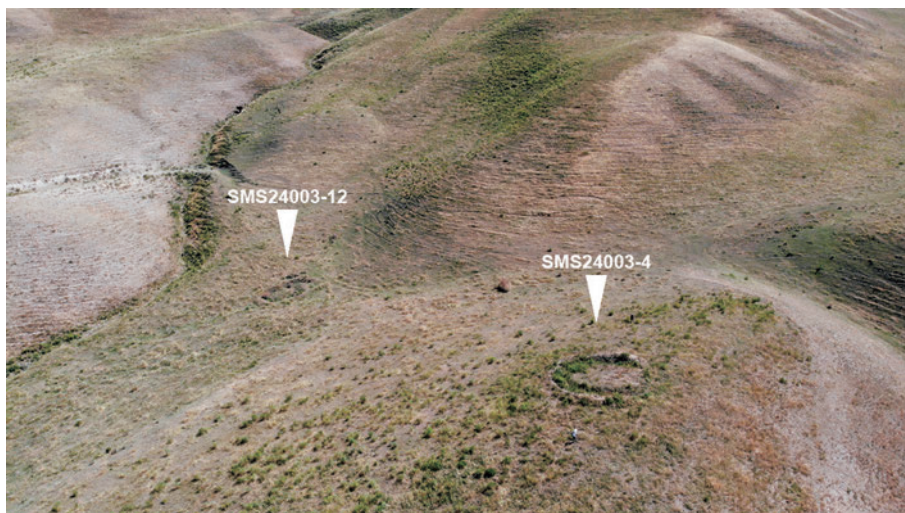


図3 円形囲い込み遺構 SMS24003-4 及び SMS24003-12 空撮(南西から)

られる埋土下層を完全に覆っていた。周溝の底面には所々に円形の黒いシミが残されており、機能時の周溝下面に起伏があったことを示唆している。おそらくは、ぬかるんだ周溝底面を家畜等が踏みつけることでこう

した痕跡が残ったと考えられる。周溝西側の内庭の大部分は平坦地であったが、SMS24001-1 全体の中心にかかる調査区西端では、平坦地に掘り込む浅い窪地(深さ 15 cm)を検出した。検出が一部にとどまった

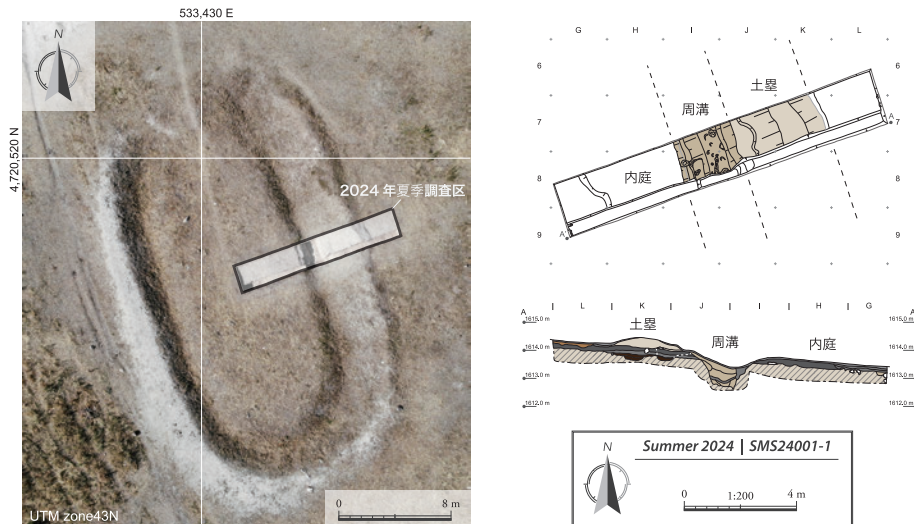


図4 楕円形囲い込み遺構 SMS24001-1 平面図・土層図



図5 SMS24001-1 周溝・土壘完掘状況(南から)



図6 SMS24001-1 周溝埋土堆積状況(北西から)

め全容は明らかではないが、SMS24001-1の中央部が円形(直径4m程度)に掘りくぼめられていたと推測される。なお、土壘の外(東)側ではいかなる遺構も検出できず、表土直下に堆積する暗灰褐色土の広がりのみが認められた。

発掘調査によって、計158点の土器片が出土した(図7)。このうち137点は内庭表土直下及び中央部の浅い窪地から出土し、この他少量のみが周溝内、土壘、遺構外側から見つかった。胎土の質感に基づき、精製・普通・粗製に分類したところ、粗製が108点と圧倒的に多数であった。胴部片が大半を占めるため大まかな器種組成のみ検証可能であったが、貯蔵用と思しき壺甕類が合わせて130点を占め、この他は水差し類及び皿鉢類と考えられる。以上から、甕壺類の多くが粗製であると判断できる。口縁部片が僅少であるため厳密な型式学的検討に適さない土器群ではあるものの、北方のアク・ベシム遺跡出土土器と比較した場合、鉢の器面全体に磨研が施される等、より古い特徴を示す傾向がある(櫛原功一氏私信)(図8)。こうした事象に

鑑みて、一連の土器群が7世紀以前に遡る可能性も考えられるだろう。

なお、土壘直下でのみ堆積が見られた暗褐色砂(10~20cm厚)から採集した炭化物1点の ^{14}C 年代測定を実施した。現在までに示された速報値は1832~1891 cal AD(1 σ)となり、土器群の推定年代と矛盾している。認識しづらい攪乱が存在した可能性も視野に入れて、土層堆積状況の再解釈が今後必要となろう。

4. ケゲティ溪谷 KGT22002-2 における追加調査

ケゲティ溪谷においては、円形囲い込み遺構 KGT22002-2 にて追加調査を実施した。2023年8月に実施した発掘調査では、時間的制約から1)周溝の完掘、また2)内庭中心の掘削を完了できなかったため、2024年8月にこれらを完了するために現地調査を追加で実施した。

前回調査完了時点において、発掘調査の対象とした KGT22002-2 の周溝西半の埋土最下層(黒褐色砂質土)



図7 SMS24001-1 内庭出土土器群

が掘削されずに残されていた。2024年8月にはこの埋土最下層を掘削し、周溝西半を完掘した。この埋土最下層からは遺物の出土が見込まれたが、結局のところ出土遺物は皆無であった。完掘により起伏に富んだ周溝底面が明らかになり、周溝が丁寧に時間をかけて造られたというよりも応急的に掘削されたことを強く印象付けている。

また、中心部に墓埋納主体部が存在しないことを検証する目的で、内庭中心に設けたサブトレンチ(東西1m、南北1.5m)の掘削を実施した。発掘調査の結果、内庭の中心部にはいかなる遺構も認められず、ただ周辺から連続する土層の堆積が見られたのみであった。これにより、本遺構が墓である可能性は完全に棄却されたとみて良いであろう。

上記の追加発掘調査に加えて、光ルミネッセンス(OSL)年代測定及び環境DNA分析用の土壌サンプリングも実施した。それぞれ、遺構の年代及び機能について検証する目的で分析を実施しているが、現在はその結果を解析中である。

5. おわりに

2024年8月に実施したシャムシー溪谷における考古学踏査及び発掘調査は、2022・2023年に行なったケゲティ溪谷における考古学調査とは異なる成果を示している。大きな点として、ケゲティ溪谷ではほぼ円形囲い込み遺構のみが分布していたのに対して、シャムシー溪谷では円形囲い込み遺構のみならず楕円形囲

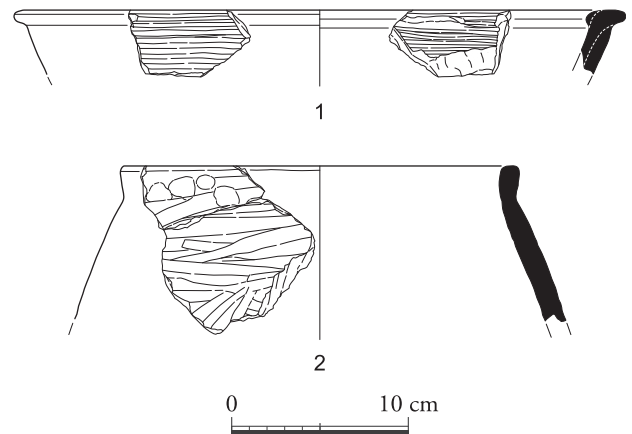


図8 SMS24001-1 出土土器実測図(1:鉢; 2:甕)

い込み遺構の分布が明らかとなり、両者の分布傾向が著しく異なることが判明した。また、外周を廻る土塁と内周を廻る周溝、そして平坦面が広がる内庭より成る遺構の構造こそ共通するものの、楕円形囲い込み遺構ではやや古めの土器が主に内庭より出土しており、円形囲い込み遺構とは異なる。今後は、両者の年代についてさらに考究するとともに、その機能についても科学分析を通じて引き続き検証していく予定である。

著者らは、JSPS21H04984 科学研究費補助金基盤研究S「シルクロードの国際交易都市スイヤブの成立と変遷—農耕都市空間と遊牧民世界の共存—」(代表:山内和也)の助成を受けて本研究を実施した。

■参考文献

- ・城倉正祥・山藤正敏・ナワビ矢麻・山内和也・アマンバエヴァ, B. 2016 「キルギス共和国アク・ベシム遺跡の発掘(2015年秋期)調査」『Waseda Rilas Journal』Vol. 4 43-71頁。
- ・帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所(編)2020『アク・ベシム(スイヤブ)2019』帝京大学文化財研究所。
- ・帝京大学文化財研究所・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所(編)2021『アク・ベシム(スイヤブ)2018』帝京大学文化財研究所。
- ・山内和也・アマンバエヴァ, B.(編)2016『キルギス共和国チュウ川流域の文化遺産の保護と研究 アク・ベシム遺跡、ケン・ブルン遺跡 —2011~2014年度—』独立行政法人国立文化財機構東京文化財研究所文化遺産国際協力センター・キルギス共和国国立科学アカデミー歴史文化遺産研究所。
- ・山藤正敏 2024『天山山脈北麓における定住・遊牧社会関係史の再構築—キルギス共和国北部、チュウ渓谷西部における考古学踏査—』独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所。
- ・山藤正敏・大谷育恵・齊藤茂雄・山内和也・アマンバエヴァ, B. 2023.3「天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る—キルギス共和国ケゲティ渓谷の考古学調査(2022年)—」日本西アジア考古学会(編)『第30回西アジア発掘調査報告会報告集』85-89頁 日本西アジア考古学会。
- ・山藤正敏・齊藤茂雄・山内和也・アマンバエヴァ, B. 2024「天山山脈北麓に古代遊牧活動を探る—キルギス共和国ケゲティ渓谷の考古学調査(2023年)—」日本西アジア考古学会(編)『第31回西アジア発掘調査報告会報告集』107-111頁 日本西アジア考古学会。
- ・Кожемяко, П. Н. 1959 *Раннесредневековые Города и Поселения Чуйской Долины*. Фрунзе, Академия Наук Киргизской ССР.